

憩いの場「レスパイトサービス」って知っていますか？

そこは子どもの世界



レスパイトサービス



園・学校から帰って独りぼっちになったり、母親や家族の人がちょっと用事で出かけた時、子どもを……………ということはありますか？必要に応じて、障害児（者）をお預かりし、家族が安心し、ゆとりを持ってもらうことを狙いとしたレスパイト（一時的な休息）の場です。

多くの方が気楽にご利用していただく事を願っています。

【サービスの内容】

◆ 緊急一時保護

家族の病気、怪我、葬儀などの突発的な出来事により、一時的に介護が困難になったときに代わって介護します。

◆ 生活援護（介護支援）

① 介護者の生活上必要な時間の保障

介護に時間を取られ、日頃おろそかになりがちなの、慶事、保護者会など、また出産などの生活に必要な事柄で介護が必要な場合、家族に代わって介護します。

また、介護者の文化活動や余暇活動についても、理由に制限枠を設けずに受け付けています。

② 日常的な介護困難への一時対応

子どもの成長につれて生じてくる介護負担の増加や、介護者の高齢化に伴う肉体的な疲労など、日常的にふくらむ家庭の問題に対して介護者がちょっと休息を取り入れ、新たな活力をもって介護できるように援助します。

※ これは、U市の知的・身体障害児を一時的に預かるレスパイトサービス「そこは子どもの世界」の案内パンフレットです。

憩の場「レスパイトサービス」

U市駅前の繁華街、静かな小路にその「憩いの家」がありました。12畳ほどの家庭の居間を思わせるような暖かな雰囲気の一部屋でした。数人の障害のある子どもたちと担当のBさんが、やや緊張気味に私を迎えてくれました。

「レスパイトサービス」という言葉は初めて耳にする言葉でしたが、そこには人権問題の課題と方向が凝縮されているように思えました。

ここにレスパイトの場を開くことになった経過を、Aさん、Bさんの話から紹介しようと思います。

昭和55年、Aさんに待望の娘Tさんが誕生する。眼が大きくパッチリとした赤ちゃんでした。しかし、健康な赤ちゃんは、ミルクをむさぼるように飲み、どんどん成長していくのに、Tちゃんはミルクを飲むより寝ている方がいいような赤ちゃんでした。Aさんにしてみると、まるで生きることを拒否しているように見え、コンコンと眠り続ける娘を見て泣いているばかりでした。

それまでお母さんを気づかい、ずっと病状を伏せていた院長先生が、お母さんを選んで「Tさんの場合には、障害があつて生まれてきました。将来的には、3歳まで生きられるか分かりません。もし生きられたとしても寝たきりかも知れない…」と静かに話します。それからのAさんは生き地獄でした。一生の涙を流しました。

絶望の中で、瀬戸内寂聴さんの本に出会います。「たいした苦しみもないかわりにたいした喜びもなく、たいした努力もしないかわりにたいした成果も得られず、ぬるま湯につかったように生きて死んでいく人間が多い中で、慟哭を味わえる人間は幸福なのだ。だから、その慟哭と真っ正面から対決しなければ真の人生は生きられない」という言葉を読んで、Aさんは現実に真正面から向き合つて行こうと決心がつき、吹っ切れたと言います。

病院で同じ苦しみや悲しみを持つ人たちと触れ合い、パワーと明るさに圧倒されながら、Aさんは自信と笑顔をとり戻していくのです。そして、不思議なことにTさんの病状も良くなり、あんなに起こしていた無呼吸の発作もなくなっていったのです。

退院後、Tさんは峠を越えたO市の施設に通いリハビリに励みます。そして、二歳になってU市の施設に入園し、そこの職員であったBさんと出会うのです。

現在Tさんは養護学校に通っています。小学校は、多くの障害を乗り越えながら地元の小学校に通いました。多くの友達に支えられながら、また多くの友達に生きる幸せと感動を与えました。

このレスパイトサービス「そこは子どもの世界」は、10年程前、Aさんが娘のTさんをBさんに預け面倒をみてもらったことがスタートとなりました。そして、障害のある子

どもをもち、その子に関わることで他の子に関われない、外へも出られない、医者にもかかれぬ、そんな困っている方がたくさんいることから、Tさん以外の子どもたちも受け入れるようになっていったのです。

現在、Tさんをはじめ20人近くの子どもたちが利用しています。

Bさんは、子どもたちを迎えに来た時の親の晴れやかな表情、子どもたちの素直に親の懐に飛び込んでいく姿は印象的で、これまでレスパイトサービスを続けてきた原点になったと言います。

知的障害児（者）とは、知的な障害があるだけで心に傷を持っている人ではない。Tさんという名前（人権）を持った一人の人間です。そんな子どもたちの笑顔を絶対に消さないためにも、背後にいる両親・家族を援助して、日頃の心身の疲れを回復し、ホッと一息つけるような時間をもってもらいたいというのが願いなのです。

Aさんは、Tさんを通して、差別すること、それに無関心であることは、子どもの命を脅かすものであることを実感し、賢さや強さ、生産性を重視する社会的風潮の中で、障害のある子には非常に冷たい世の中であることを知ったと言います。

障害児（者）は地域の人に助けてもらわないと育てられないし、親が死んだら障害児は生きていくことができないのです。そのためにも、街の中心にあるこの「憩いの場」を大切にしていきたい。そして、いつかは「憩いの場」が障害者の作業場、健全者と障害者が触れ合う交流の場として、地域に根ざしていけるようにしたいと考えています。

そして、このレスパイトサービスは利用する人が求めたいサービスを要求し、それに応えるかたちで成り立っていく福祉の先端を行っているのだと自負し、こうした地域に根ざした小さな「憩いの場」がネットワーク的にあちこちに出来ることによって、障害児をもつお母さんたちがどこへでも自由に出かけられるようにしていきたいと夢を語ってくれました。

私と話をしながらも子どもたちに温かい目をそそぐBさん、そして、精一杯の思いを込めて私を歓迎してくれた子どもたちとAさん、私にとってもホッとするような穏やかな時間でした。

どうして部落だけが

きらわれたり 苦勞するの

みんな同じ人間なのに

どこがちがうと言うの

かあちゃんは齒をくいし

暗い田んぼに向かつて おおきな声で

どこがちがうんだ！おれだ

胸の中がスーと軽くな

とめどなく涙が出てきた

今にみる 今にみる

心の中で叫んだら

涙がいつの間にか怒りに

もう かあちゃんの細い

涙は出ない

文字を知らないことが

ことばがうまく言えない

いろいろなことをしている

貧しさの中で文字を奪^{うば}われたことも

みんな文字を取り戻そう

部落解放 部落解放とい

文字をおぼえることで

部落をよくする運動だと

わかってきた

部落のかあちゃんたちの

今の置かれた立場もわか

学習して自分を強く変え

文字を知らないことが

どんなに悲しいものか

親の苦しみを二度とさせ

かあちゃんもがんばる

差別なんかに負けるな！

強い子どもになれ

著者紹介 一九二九（昭和4）年南佐久郡佐久町の被差別部落に生まれる。小学校には差別による貧困の為、ほとんど通えなかった。小学校

6年（当時の義務教育は6年）の途中で家計を助ける為、福井県の紡績工場に就職。ここでも字を知らないため、悲しい思いをする。どうしても字を覚えたいと独習したり、人に教わる。文字を覚えた加藤さんは「文字を知って世の中見えてきた。文字を知るとは生きることなんだ」と差別に立ち向かっている。（とりあげた詩は、昭和五三年発表のもの）

参 考

大阪府同和教育研究協議会編「わたし出会い発見パート2」（一九九八・三）「3」字を知るといことは生きるといこと」（ワ
クシヨップ）

加藤光子著「こころの扉」一九九九年発行より